

## C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

## ＊ローマで双子育児⑥＊

浅田 朋子

ローマでも、市立保育所に入所を希望する子供に対して、保育所が不足して定員が一杯で入所できない待機児童が問題になっている。イタリアの所得の低さを考えると、共働きでも私立保育園に通わせるのはかなり厳しいだろう。このような事情から、多くの親が祖父母に子供を預けている。

私がいつも双子を連れて行く公園は、小学生前の幼児を連れておじいちゃん、おばあちゃんであふれている。この前など公園に20人ほどの子供がいたが、みな祖父母と来ていた。あるおじいちゃんは、85歳くらいで腰が曲がってほぼ下を向いた体勢で3歳の孫を連れてきていた。おじいちゃんの方が孫に手を引かれて散歩に連れられているようで、みな不謹慎にもくすりと笑っていた。このおじいちゃんは特別高齢だが、イタリアも晩婚で祖父母が高齢化し、乳幼児を連れてくる祖父母にしてはけっこうな歳の人が多い。体力的に孫のお守りはかなりしんどいだろうが、待機児童の問題など、他に預ける事のできない事情があるので、面倒をみるしかないのだ。

私たちが晩婚なので、娘たち双子は2歳半だが義両親は70歳である。近所に住んでいて退職している彼らが交代で毎日の散歩や買い出しなど全面的に協力してくれるので、保育所には入れていない。

ほぼ毎日、祖父母と過ごしている双子は、彼らから大いに影響をうけている。私と双子との会話は完全に日本語にしているので、特にイタリア語は一番身近な祖父母から多くを学んでいる。

家族の中でも双子にイタリア語、そして行動の

影響を特に及ぼしているのは義母である。声が大きく滑舌もいいので、双子は彼女の言葉をすぐ覚える。最近影響されすぎて、行動や言動がおばあちゃん化してきている。



【祖父母宅で遊ぶ双子ちゃん】

ある日、ベッドから起きる時に双子のひとりが「oddio, oddio, oddio, ahi ahi ahi・・・(なんてこと～あいたたた・・・)」と言いながら腰を押さえて起き上がった。「腰・痛い?」と聞くと「Si・・・」といながら腰をさすっている。また義母のまねして「な・・・」と思いつつ「大丈夫?」というのと「Non ti preoccupare, tesoro mio(心配しないで、あなた)」というのである。なにこの上から目線の返答。これも義母が双子に対して言っているのをまねてい

るのであるが、tesoro mio は amore mio のように恋人(夫婦)や子供の名前の代わりに“大切な人”の意味をこめた呼びかけとして使われているので、特に双子が私に対して言うとおかしいのである。夫に「双子に tesoro mio と言われたわ」といったら「格下にみられてるのかな?」といわれた。

余談だが、義父と電話して切り際に、ついつい主人との電話の癖で「Ciao amore」と義父にたいして言ってしまった時は、本当に恥ずかしかった。しかも、いつも冗談ばかりで切り返してくる明るい義父が「……」とかなり引いている雰囲気だった。愛情を込めた呼びかけの言葉も、場所と使う相手を間違えると、とんでもない気まずい雰囲気になるので要注意である。

義母はしっかり者で手際も段取りもよく、双子の世話も上手い。が、手抜きせず全力で面倒を見るのでいつも疲れている。義父は温厚で優しく冗談好きで、そしてものすごく心配性である。先の事をやたらと不安がり、いつも無駄に悩んでいる。双子が誕生して一番楽しく幸せな時期も「こんな可愛い双子の姿を、そんなに長く見られないかも……」と明日にでも死ぬかのような勢いだった。「長生きできないと思っている人が一番長生きするねんで」と励ましたが、双子を交互に抱きながらため息をついていた。そんな義父のことを義母は「見るとイライラするわ～」と舌打ちする。

こんな調子なので、双子が怪我したり、ちょっと蚊にほっぺたをさされてその跡が残っていたりしても深刻になる。公園のブランコもゆるくしか押さないで「もっと強くー」と双子に言われている。そのわりには公園にいる時に友人から携帯に連絡があると、おしゃべりに夢中になって全然双子を見ていない。注意力散漫な義父は、外出時は要注意人物である。

そんな義父と子どもたち 4 人で公園を散策していたある日のこと、4歳の男女の双子を連れた母親と知り合った。双子男女は金髪でとてもきれいな顔立ちをしていた。母親はお世辞にもきれいとは言えない。黒髪で魔女のような顔立ちである。ノーメイクで鋭い目つきから醸し出される雰囲気はちょっと近寄りたくない。でもお互い双子という事で何となく話しはじめたのだが、かなりローマ弁がきつい。それなのに子供たちはきれいなイタリ

ア語でしゃべるので何とも不思議だった。どうもいろいろ家庭の事情がありそうな感じた。あまり自分の事については話さないが市立幼稚園に入れなくて、預けられる人もいないということは言っていた。唯一、土曜日に叔母が預かってくれるらしい。魔女のような母親と金髪で美しい双子は、似てはいないが血のつながりはある雰囲気なので義父が「父親を見てみたいなあ～。どんな美男子なんだろうな。」といていた。

3回目に公園でこの双子男女と会った時、子供たちはすぐに仲良く遊びだした。しばらくするとこの母親に「ちょっと頭が痛いから頭痛薬を買ってきたいの。5分ほど子供をみといてくれる?」と言われた。

え?と義父と顔を見合わせたのが、聞くとすぐそばの薬局に行くので、まあ、私たちは2人だし大丈夫かと思い「いいですよ。」と言った。「ありがとう。」といて母親はすぐに急ぎ足で公園を去っていった。



しかし15分経っても帰ってこない。薬局は公園から3分ほどの場所にある。義父が「なんか…遅くないか…」と心配し始めた。「なんか、こういう事件あったなあ～。公園で母親に少しかけ子供見と

いてくださいって言われて帰ってこなかったってやつ。」私も少し心配だったが子供を置いていくような人に見えなかったので冗談を言ってみた。ところが義父はみるみる慌てだし、「今すぐ、今すぐあの薬局に探しに行ってくる・・！！」と私と双子4人を置いて公園を飛び出していったのである。2歳と4歳の双子4人を私1人に置いていくなよ！私はあつけにとられて「ちょっと！かえってきてよ、おーい！」と叫んだがまったく聞こえてない様子で、薬局の方へ向かって行った。それを見ていた4歳双子女児の方が「・・・マンマ、どこ？」と聞いてきた。ほらあ～、子供って敏感なんやから。「マンマ、どこ！？」頼む・・・頼むから泣かないでくれよ・・・おばちゃん、自分の双子でもう手いっぱいフラフラだから、君たちまで面倒みれへんよ。「えーと、お薬買いに行ってる。もう戻ってくるよ。」というど「・・・ふーん。」と不安そうである。

しばらくして義父が戻ってきた。「わたしら置いていくなんで信じられへん。義父が1人で帰ってきたということは・・・母親はどこいったん？」「薬局にいて聞いたたら、そんな人来てないって言われた・・・。」

おや、これは・・・ちょっとまずいかも。「で、どうする。」「どうするって何が。母親帰ってくるの待つしかないやん。」「40分も、いったいどこにいったんだ・・・。」「でも40分だし。もしかしたらほかの薬局に行ったんかも。」義父はイライラしながらあたりを見回している。

夕方になり、公園にいた人も家に帰っていくのを見てもますます不安にかられた義父は「よし・・・警察に行ってくる。」と言い出した。「え！？もうちょっと待ってみようよ。」といっても聞かない。「もしもだ、本当にこの子たちを置き去りにしていたら・・・たしかに、たしかにこの子たち良い子で可愛い・・・でも、4人の双子の面倒は、さすがに見れん！」おいおい、決断はやいな！双子男女を引き取るつもりか？また妄想がはじまった、と思ったところへ母親が戻ってきた。

「ああ、すみません。遅くなって」と青ざめた暗い顔で謝った。子供たちは「マンマ！！」と飛びついていた。義父は「心配してたんですよ、子供たちも不安がってたし。」といつもの義父とは違う強い口調で言った。「薬をすぐ飲みたくて、ボールに行

って水を買ったりしていて・・・。」と言うが、真相はわからない。とにかく帰ってきたのでほっとした。もう一度「すみませんでした。」といい、子供の手を引いて家に帰っていった。いろんな事情があって苦労しているであろうこの母親の気持ちや状況を考えると、何とも言えない気持ちになって義父のため息をついた。



双子を溺愛し、全力で面倒を見てくれる義両親がいる私たちは本当に恵まれていると思う。頼れる人がなく、孤独に1人で子育てをしなければならぬ母親は本当に息つく暇もなく子育てにおわれ、疲労困憊していることだろう。この双子男女の母親も、もうどうにもこうにもしんどくなって、ちょっと息抜きしたくなつたのかもしれない。が、だからといって子供を置き去りにし不安にさせてはいけないのだが、同じ双子をもつ母親として、その切羽詰まった感じもよくわかる。

イタリアでも日本でも育児での祖父母の協力ほどありがたいものはない。公園で孫を愛しく見守る祖父母たちをみるたびに、その愛情を受けることのできる孫たちは幸せだと思う。今年9月から幼稚園に行く双子。それまでのあいだ、彼女たちも存分に祖父母との時間を楽しんで欲しい。

(元当館語学受講生)

## ナポリの哲学者

国司 航佑

ナポリ留学を終えてから4年半が経過した。筆者もいまや大学で教鞭を取るいっばしの教員である。時に勘違いされることがあるのだが、大学の「春休み」は教員にとっても休暇であるというわけでは決していない。「春休み」はあくまで学生にとっての休暇であり、教員はこの期間も働いている。入試を一大イベントとしてその他さまざまな事業があり、それらの運営に教員が尽力するのである。加えて、新学期からの授業準備もこの時期に行われる。授業期間に比べれば仕事の総量は少ないが、かといって海外旅行できるようなまとまった休暇が取れるわけでもない。

しかし、イタリア語の教員である限り、定期的にイタリアに滞在する機会をもつことが望ましいに違いない。毎年20人近くの学生をイタリアに派遣している大学の教員であれば、なおさら「現在のイタリア」を知っている必要があるだろう。それに、これも忘れられがちなことだが、大学教員は研究者でもある。研究成果の発表のためにも、資料蒐集のためにも、年に一度くらいはイタリアに行った方がよい。以上のように考えて、筆者はイタリア行を決めた。スケジュールを調整し、学科内の会議を一度だけお休みさせてもらって、1週間強のナポリ出張を断行したのであった。

今回のナポリ滞在の最大の目的は、2月17日に予定されたイタリア哲学研究所における研究発表である。筆者は、ナポリに研究生として留学していた時分(2010-2012)から、イタリア歴史学研究所、ナポリ大学(通称フェデリーコ2世大学)に加え、このイタリア哲学研究所に足繁く通った。とりわけ、研究所の事務局長を務めるアントニオ・ガルガーノ先生にはお世話になったものである。イタリア哲学研究所では様々なイベントが行われており、哲学に関連する講演のみならず、コンサ

ートや演劇が催されたりもしている。また、ガルガーノ先生自身も、高校生に向けて哲学講義を年間通じて行っており、筆者はこの哲学講義の熱心な聴講者であった。

( [https://www.youtube.com/user/AccademiaIISF/videos?sort=dd&view=0&shelf\\_id=1](https://www.youtube.com/user/AccademiaIISF/videos?sort=dd&view=0&shelf_id=1) )

まず、ソクラテス以前から現代哲学に至るまでを講義の対象とする彼の膨大な知識に驚かされた。しかも、彼の講義は教科書をなぞるような浅薄なものではない。毎回の授業で一人の哲学者を取り上げ、高校生にも分かるような平明な語り口でありながら、本質に迫ろうとする興味深い講義であった。筆者がさらに感心したのは、彼の学者としての振る舞いである。「publish or perish 発表せよ、さもなくば滅びよ」という標語が掲げられるアカデミックの世界においては、業績というのがとても重視される。だから研究者はみな、優れた研究発表を重ねて業界で認められようとするのである。競争原理が働いて各人が研究に精を出すようになるのだとしたら、この傾向は歓迎されるべきであろう。だが、研究の最終目的は、他人に認められることではなく、科学の世界に貢献することでなければならない。ガルガーノ先生は、輝かしい業績を残した研究者ではないが、高校生に向けた授業を無償で行い続け、科学の世界に確かに貢献した人物である。筆者には、その姿が、一つの著作も残さずに哲学史に最も巨大な足跡を残したソクラテス(あるいは、近代言語学の生みの親フェルディナンド・ソシュール)のそれと重なって見える。

そもそもイタリア哲学研究所は、法哲学者ジェラルド・マロッタが1975年に設立した哲学振興のための機関である。マロッタが哲学に注いだ情熱は、いくつもの逸話に語られるほど尋常ならぬものだったらしい。ハンス・ゲオルグ・ガダマー、ユルゲン・ハーバーマス、ポール・リクール、ジャック・デリダ、カール・ポパー、パウル・オスカー・クリステラー、ノルベルト・ボッビオ、エウジェニオ・ガレンといった当代随一の思想家たちが、マロッタの熱意に動かされた。彼らのサポートを得て、イタリア哲学研究所は華々しくその活動を繰り広げた。そして、マロッタの右腕として創設当初から

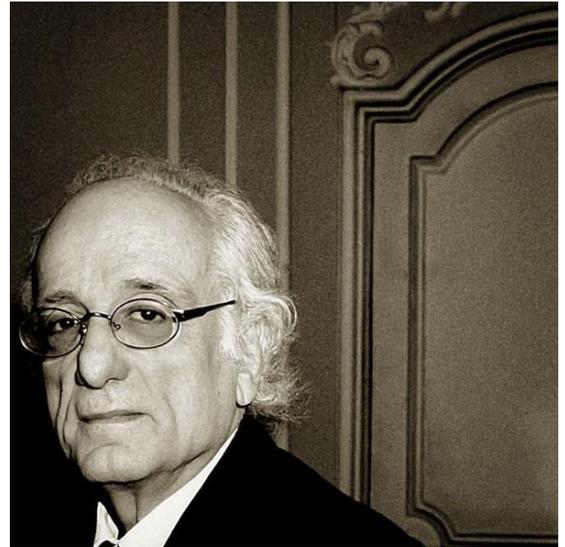
研究所の運営をしていたのが、ガルガーノ先生であった。

ガルガーノ先生は、ナポリ人特有の陽気さがあるわけではないが、真面目さと優しさが滲み出るような方であった。イタリア人の先生、特にナポリの先生は、敬称の Lei を使わず、親称の tu を使って親しさをアピールすることが多い。だが、ガルガーノ先生は Lei を使って筆者と話し続けている。当初は距離を取られているのかとも考えたが、どうやらそういうことでもないらしい。ナポリ留学中、筆者はしばしばガルガーノ先生に声をかけられ、若手研究者の集まる読書会に呼ばれた。記憶している限りでは、ホルクハイマーとアドルノの共著『啓蒙の弁証法』やフィヒテの『学者の使命について』等を読んだように思う。筆者は他の研究者たちに比べイタリア語による討論の能力が非常に劣っていたが、ガルガーノ先生は必ず筆者にも発言の機会を与えてくれた。先生は気遣いの巧い人だったのである。

さて、ナポリ留学が終了して2年半後(2015年2月)、再びナポリを訪れる機会があった。ガルガーノ先生にその旨を連絡すると、一つ研究発表をしてくれないかとの申し出があった。だが、その際は日程の調整がうまく行かず、今回は難しいですが次回は必ずお引き受けしますと返答した。そのこともあって、今回のナポリ訪問ではガルガーノ先生に滞在予定を少々前もって連絡した。前回はやむなく断りましたが、今回はぜひ研究発表をさせていただきたい、と伝えたのである。ところが、ガルガーノ先生の返信は、筆者の研究発表をオーガナイズすることは難しいかもしれない、というものだった。というのも、なんとさる1月25日に、法哲学者ジェラルド・マロッタが逝去していたのである。マロッタの死にはナポリ中が涙にくれたらしい。イタリア哲学研究所の混乱は推して知るべきだろう。

結局、筆者の研究発表は行われることになった。2月17日金曜日。司会をしてくれるのは、筆者の指導教官でもあるエルネスト・パオロツィ教授である。だが、当のガルガーノ先生は残念ながら参加できないということが伝えられた。事情はよく分からない。筆者は、昨年出版された拙著を渡したから、いつでもいいのでとにかく挨拶に伺えな

いか、とメールで尋ねた。だが再び、今回は残念ながら会うことができないという返答がきた。マロッタの死は、それほど大きな衝撃を与えたのだろうか。



【法哲学者 ジェラルド・マロッタ】

出典元: [https://it.wikipedia.org/wiki/Gerardo\\_Marotta](https://it.wikipedia.org/wiki/Gerardo_Marotta)

そうこうしているうちに、発表当日となった。演題は「戦前の日本におけるクローチエの自由主義の受容」。神風特攻隊の一員として戦死した学生がクローチエの自由主義思想に傾倒していたこと、歴史学者 羽仁五郎がナポリの哲学者クローチエと手紙のやり取りをしていたこと、等について話した。ナポリの哲学者と極東の島国との間のにわかには信じがたい交流を紹介したのだから、ナポリの方々の関心を惹くことには成功した模様である。加えて、筆者の友人が多く聞きに来てくれたことが嬉しかった。だが、これまで筆者が研究所で発表をした際には必ず参加してくれていたガルガーノ先生がその場にいなかったことは、やはり寂しかった。筆者はガルガーノ先生のことを考えながらこの発表を用意していたのである。

これは、ナポリ滞在中に知ったことだが、実は昨年10月、マロッタがこの世を去る3か月前から、ガルガーノ先生はイタリア哲学研究所の事務局長の職を離れていた。マロッタの遺族との経営方針の違いが原因だったと噂されているが真相はよく分からない。一つ確かなことは、筆者にとってガルガーノ先生のいない研究所は同じ研究所だ

とはいえないということである。以前ガルガーノ先生は、「私は哲学者と呼ばれることを好まない、せめて哲学史研究者と呼んでもらいたい」と述べていた。だが、筆者の心の中では、ガルガーノ先生は紛れもない「ナポリの哲学者」である。「ナポリの哲学者」は今どこで何をしているのだろうか。



【イタリア歴史学研究所の入り口】

出典元：[https://it.wikipedia.org/wiki/Istituto\\_italiano\\_per\\_gli\\_studi](https://it.wikipedia.org/wiki/Istituto_italiano_per_gli_studi_filosofici)

filosofici

さてさて、この連載もついに20回の大台を突破してしまいました。思い起こせば、初回の記事を執筆したのは2011年2月……今から6年も前のことである。筆者は、1998年に北イタリアのトレントという都市に高校生ながらに1年間留学し、その後、2010年の秋から、博士課程の研究生として合計1年半余りの期間を南イタリアのナポリで過ごした。つまり、本連載を開始したのは、ナポリ留学という第2のイタリア体験が始まってからまだあまり時間の経っていない頃のことだったのである。

その頃の日々の生活は、とても刺激的なものであった。トレントでの経験を通じて筆者の脳内に構築されていたイタリアのイメージが、ことあるごとに破壊されていったからである。お店に入ったら挨拶しなさい……挨拶は、男同士なら握手、女性同士あるいは男女間ならほっぺたにキスだね……等々。そう、これらの「風習」が、ナポリには全く当てはまらなかったのである！ナポリでは、挨拶を交わさずに会話が始まることもあるし、男同士で頬キスすることもあれば、腕を繋ぐことさえある。そこには、筆者の知っているイタリアとは全く違うイタリアがあったのだ。筆者は、ナポリでイ

タリアを再発見した。そしてそれを本連載のテーマとしたのである。

ところが、筆者のナポリ滞在は2012年で終わった。その後も、イタリアに関する発見がなかったわけではない。イタリア文化研究者として、イタリア語教師として、京都在住イタリア人の友人として、そして、ヨーロッパに住むイタリア人たちのペンフレンドとして、イタリア文化に関わり続けたからである。ただ、それは筆者のイタリア観を短期間で劇的に変化させてしまうようなものではなかった。少なくとも、「イタリア再発見」というテーマにふさわしい記事を書くことは、徐々に難しくなっていた。

今回のナポリ滞在中にも、新たに特別な驚きを与えられることはなかった。そしておそらく、筆者が「イタリア再発見」をすることはこれからもないだろう。だから、本稿を以ってこの連載を終えようと思う。長い間お付き合いありがとうございました。

(京都外国語大学講師)

## ～会館だより～

### イタリア語 無料体験レッスン

4月より開講の春期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

●京都本校：日本イタリア会館

3/31(金) 11:00～12:30

4/1(土) 11:00～12:30

●四条烏丸：ウイングス京都

4/3(月) 19:00～20:30

●大阪梅田校：大阪駅前第4ビル

3/31(金) 19:00～20:30

### スペイン語 無料体験レッスン

●京都本校：日本イタリア会館

4/1(土) 13:00～14:30

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: [centro@italiakaikan.jp](mailto:centro@italiakaikan.jp)

URL: <http://italiakaikan.jp/>